

鯛漁の御菜浦富津漁港

絵と文・熱田親憲 題字・熱田泰華

紀伊・房総

くろしお物語

◇37◇

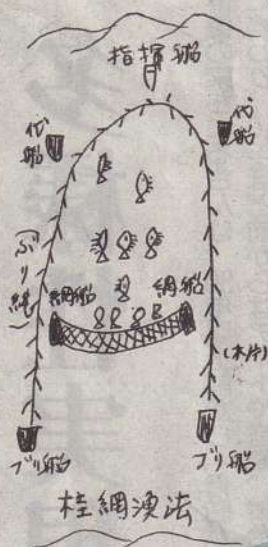
東京湾沿いのJR内房線の富津駅が最寄りから夏にかけて潮干狩の富津漁港は現在2カ所に分かれ、北側の富津地区は潜水器漁とのり養殖で生産量千葉県

1位の本場である。江戸時代にさかのぼると、1623(元和9)年、紀州(湯浅町)の漁師・栖原角兵衛が、鯛漁の桂網漁を安房国長狭郡浜荻(鴨川市)から館山地方へ試み、ついに内湾を北上して上総国天羽郡秋生村(富津市)に

落ち着いた。彼は当地に桂網漁業を広め、鯛は秋生村名主斎藤三郎の用水揚げが上がり、周左衛門に網船と諸道具、納屋共一式を120両で譲渡。桂網は地元主導の鯛漁となった。昭和と続き、太平洋戦争で一時中断されたが、戦後復活された。

桂網の漁法は紀伊国富田郡のある漁民が考案したという大規模な旧式漁法である。ぶりを取り付け、それを地引網で囲んで漁獲する漁法で、7艘の船には「御用」の旗を掲

真鯛



桂網イラストと鯛釣り人

男のロマン「桂網」

40人以上の人員を要する。桂網漁法は野狼が

時佐貫八幡に居住されていた歌人が、桂網の賛歌を歌ってくれた。

タマジャクシをとらえることからヒントを得たということから「か蔵、相模三方国28カ村、漁具破損の漁師同士のトラブル、公儀御用を命じられた魚問屋と休る竹岡に 鯛網見んと妻もあて来し

の好物とする椿の当たり年とは豊漁である——末期まで続いたよう

だ。桂網には文明開化による男のロマンと時代の流れを感じさせられ

る。1700(元禄13) 1877(明治10)

がある。